すいかずら

平成20年2月10日発行
編　集　社寺建造物美術協議会
発行人　澤野道玄

〒604-8232　京都市中京区錦小路通
油小路東入る空也町491
㈱さわの道玄 内
TEL (075)254-3885　FAX (075)254-3886

選定保存技術保持団体としての国の補助事業がスタート

昨年11月から国の補助事業がスタートしました。その第一弾として彩色の実技研修を実施しました。今回は彩色技術の初級者を対象に、彩色の基本的な技法である繧繝彩色の実技研修を行いました。実物の斗栱を使い、6日間にわたって胡粉作りから上塗りまで通しで実習しました。

◆日　程	平成19年11月26日～12月1日
◆会　場	長野県塩尻市木曽平沢　楢川公民館
◆講　師	松村年恒先生　㈲川面美術研究所
◆研修生	石本　ゆう子　㈶塩尻木曽地域地場産業センター
	石本　則男　㈶塩尻木曽地域地場産業センター
	岩原　慎　㈶塩尻木曽地域地場産業センター
	広田　純一　㈶塩尻木曽地域地場産業センター
	深井　公　㈶塩尻木曽地域地場産業センター
	宮原　善宗　㈶塩尻木曽地域地場産業センター
	出口　晨太郎　㈶川面美術研究所
	中澤　梢　㈱小西美術工藝社
	山田　亜紀子　㈱さわの道玄

胡粉作り。先生の動きに真剣に見入る。

◆岩原　慎

今回の研修ではまず胡粉の溶き方から教えてもらいました。初めてやることで、膠を足す時も少しずつ足していかないと上手く行かず失敗してしまいました。それでも先生に丁寧に教えてもらい、少しずつ作業を進めていきました。何とか最後までやることが出来ましたが、とても繊細な仕事だなあと感心しました。

胡粉塗り。

◆深井　公

練習用に貸していただいた材料は、実物と同じものなのでやりがいがありました。何色か塗っていくうちに寺社に塗ってあるものを思い出し、張り合いが出ました。彩色は漆と比べて直ぐ色が出て、結果が早くこれも楽しいことでした。

失敗もありましたが、初めてにしては手応えのある研修になったと思います。今後仕事を続けていく中で、今回伝統的な仕事をまた一つ体験したことで、また新たな気持ちで仕事が出来そうな気がします。

◆石本　ゆう子

彩色の仕事では、今の世にあっても絵具を指で練り、指が最も重要な道具の一つだということに驚きました。昔ながらの方法が継承されているのは、それに勝るものがないからだと思います。そのように人そのものを頼りにする仕事にとても温かみと魅力を感じました。

松村先生のご指導は素人にもわかりやすく、初歩的な質問にも丁寧にお答えいただき、今回の研修内容におきましては、自分の中で理解せずに終えたことはないように思います。先生のお蔭をもちまして彩色への興味が大いに増しました。

型刷り。型にも工夫が凝らしてある。

彩色。先生の手許を観察しては作業へ。

◆宮原　善宗

漆とは異なる画材、技法を用いての研修は楽しみながら作業が出来ました。本業も未熟な中では彩色の知識は多少得られても、実際の作業はままならず…。

ただ先生をはじめ先輩方の作業を見、幅広いお話を聞けたことは一番の収穫になったと思います。この機に他の職人さんの工房を拝見できたことも刺激になりました。今回参加させていただいた彩色に限らず、広い視野をもって他の世界にも積極的に触れる機会を作っていきたいと思います。

◆広田　純一

今回の繧繝彩色技術研修会では、一週間にわたり下地から仕上げまで通して勉強することができた。一昨年の剥落止補彩とクリーニングに続き、経験の浅い自分にとっては大変貴重な体験になりました。

講師の松村先生には、穏やかな話し方で色々な技法や自分の経験など細かく御指導いただきました。また他の研修生の方々からの先生への質問の中にも自分が気が付かないことや新しい発見があり、一日が短く感じられた一週間でした。

◆石本　則男

一番苦労したのは絵具の調合と使用中の調整でした。うまくぬれたかと思うと薄くなり、夢中になって塗っていると濃くなりすぎてブツブツが出来たりと、塗り肌に納得できるものがありませんでした。

作業も終盤に差し掛かり、さらに集中。

伝統の中で培われてきた技法を一つマスターするのは大変だと思いますが、これを機に産地の文化財修復の仕事に何とか役立てていければと思います。木曽漆器組合の文化財修復事業の責任者の立場として、この講習会に地元の20代の青年2名が参加してくれたことが非常に嬉しく、心強いものを感じました。

完成した斗栱を囲んで。

◆出口　晨太郎

温度、湿度、光量の安定した室内の環境で、膠や水の加減、絵具の理想的なコンディションの作り方等、日常の仕事の中でおろそかになっていた作業ムラを根本から見直すことが出来たと思います。天候に影響されがちな現場での普段の仕事に対し、室内でゆっくりと基礎を確認しながら作業できたことは、今後に活きる有意義な経験になったと思います。

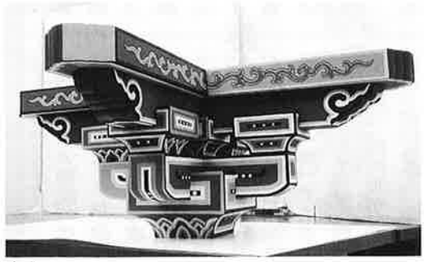
◆中澤　梢

普段の作業現場ではなかなか詳しく聞く機会を得なかったので、今回非常に良い機会となりました。先生の手を見ながら学べたのが、ほとんど初めてのことが多かった私にとってはとてもありがたかったです。

毎日指で画材に触れていくうち、全く馴染みがなく扱いにくいと思っていたものに少しずつ慣れていくことが出来ました。また地元の職人さんや他社の皆さんとおしゃべりをしながらの研修はそれぞれの違った見解の発見が共有でき、とても興味深く思いました。

◆山田　亜紀子

研修の後になるにつれ型紙の切り方、金泥の溶き方など細部のことで全く違う合理的な方法を教えていただき、大変勉強になりました。また職人の方々から、違う立場、視点から見た質問が出て、そのことによって理解が深まったように感じます。今まで材料の特性や値段などに無関心だった事を恥ずかしいと思いました。どんな角度からの質問に対しても非常に明快でわかりやすい回答が得られたのは、川面さんの研究と実績があってこそ。先生の人柄か、いつも何かしら笑いを交えながら和やかに進行していたので、基本的、初歩的な事柄でも一から聞きなおすことが出来ました。


完成。

金工技術研修会

●日　　時　平成20年1月11日～12日

●参 加 者

森本　大隆	㈱森本錺金具製作所
横山　智明	㈲横山金具工房
山本　睦	㈱小西美術工藝社
松井　紀明	㈱小西美術工藝社
大谷　英一郎	㈱大谷相模掾鋳造所
大谷　雄二郎	㈱大谷相模掾鋳造所
石黒　文香	㈱さわの道玄

●研修場所　三重県桑名市・鈴鹿市

春日神社青銅製の鳥居の前にて。

鳥居は経年変化で鈍い黒色に変わっている。

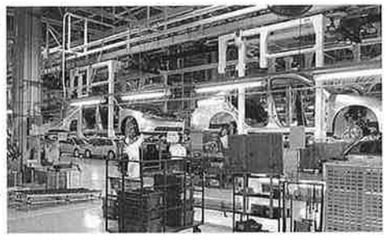
◆春日神社（桑名市）の青銅製の鳥居を見学。

桑名は古くから鋳物の町として知られています。旧東海道桑名宿の春日神社には寛文7年（1667）7代藩主の松平定重が建立させた青銅製の鳥居が今も残っています。鳥居は幾度か戦災や天災に遭うも、その都度修復がなされて今に至っており、伊勢湾台風の時に堀から流されてきた船が衝突し倒壊した際の傷跡が今も残っています。

◆本田技研工業㈱鈴鹿工場見学

続いて訪れた本田技研工業鈴鹿工場では、コンピューター制御による最先端の機械設備を駆使した組み立てラインを見学しました。

私たちの業界の伝統的な手仕事とは対照的な物づくりの現場ではありますが、意外にも機械のみに頼る作業は少なく、人が機械の助けを借りて次々とパーツを組みつけて行く様子が印象的でした。


組立工場ラインを見学

会員研修会

●日　　時　　平成20年11月30日～12月1日
●研修場所　　和歌山県高野山

昨年秋も深まる頃に和歌山県高野山にて会員研修会を実施しました。

今回の研修会には10社13名の参加があり、講師に和歌山県文化財センターの鳴海祥博先生をお迎えして、高野山徳川家霊台と奥の院経蔵を見学しました。

徳川家霊台は高野山の中心寺院「大徳院」に東照宮として建立されたもので、家康霊台・秀忠霊台とが並んで建てられています。両霊台とも全く同型ですが、家康霊台には鳥居が建ち、墓股彫刻が「虎」、障壁画が「鷹」であるのに対し、秀忠霊台は墓股彫刻が「兎」、障壁画が「獅子」になっています。霊台内部は一面に漆、彩色、金碧障壁画で飾られていて、須弥壇と厨子は蒔絵のあらゆる技法が駆使されています。また、隅々に打たれた錺金具も大変すばらしいものです。

奥の院経蔵は石田三成が母の菩提を弔うために慶長4年（1599）に高麗版一切経を奉納すると共に造営しました。外観は素木で比較的質素ですが、内部は輪蔵とともに一面に彩色が施され、桃山期の彩色としても、とても貴重なものとされています。

今回の研修では、一般には公開されていない貴重な文化財の内部を見学させていただきました。会員の皆さんはご自身の専門分野を超えて熱心に見入られ、鳴海先生にもさかんに質問がなされ、意見交換されていました。

霊台内部の荘厳彩色

また翌日には高野山常喜院御住職で高野山専修学院にて教鞭をとられている加藤栄俊様、蓮華上院御住職で高野山高校校長を務められている添田隆昭様の御講話をいただき、高野山の歴史や文化についてお話をお聞きしました。仏教の霊地であると同時に、人の営みと文化が連綿と受け継がれてきた高野山の歴史の厚みを改めて感じさせていただいた研修会となりました。

建造物装飾技術国内研修

国内研修では、4人の研修生がそれぞれの研究テーマに沿って日本国内各地に取材、研修に赴き、そこで得た成果や考察をまとめています。
昨年の11月から今年3月まで5ヶ月間にわたって実施され、研修終了後にはその成果をまとめて報告していきます。

◆ 研修生および研修テーマ

生田光晴	㈲川面美術研究所	「社寺建造物における彩色痕の撮影技術に関する研修」
齋藤潮美	㈲齋藤漆工芸	「社寺建築に見られる漆・彩色について」
酒井清裕	㈱さかい	「各時代における装飾金具の特色」
信正靖雄	㈱さわの道玄	「保存修復において使用する材料・今後の課題等について」

修復現場から～

株式会社 大谷相模掾鋳造所

大阪市今里の工房を訪ね、大谷秀一さんにお話を伺って来ました。

株式会社大谷相模掾鋳造所の歴史は大変古く、創業以来社寺仏閣の鋳物製作に従事され、元和二年（1616）には掾位（じょうい）を受けられています。その後も文化9年（1812）には大掾位を受け、代々その技を受け継がれてきました。戦中から文化財関係の仕事を始められ、その後空襲で大阪四天王寺から東成区東今里に工房を移され現在に至っています。

大谷さんは幼い頃から先代の仕事を身近に見て来られ、ごく自然に家の仕事を手伝いながら鋳物の仕事を始められました。20代の頃には弟の晴英さんと共に、先代について法隆寺の相輪や名古屋城の鯱などの現場に入られ、以来晴英さんと二人三脚で今日までやって来られています。現在は長男の哲秀さんが会社を継がれ、晴英さんの三人の息子さんの英一郎さん、雄二郎さん、隆義さんと共に家族一丸となって仕事をされています。

炭酸ガス法の型作り。
珪酸ソーダを含む砂型に炭酸ガスを注入することで、焼かなくとも固めることができる。この製法で作業スピードが飛躍的に向上した。

大谷相模掾鋳造所では原型作りから仕上げまでを一貫して製作されています。伝統的な鋳物の仕事ではまず型作りが重要で、高度な技術を要します。使用する材料や施工法も仕事に応じて変えていかねばなりません。鋳物では一つとして同じ仕事がないことから、技術を極めるということは非常に難しいのだそうです。大谷さん曰く「何でも数を当らなあきません。」とのこと。何度も繰り返し試行錯誤して、その積み重ねでどんな仕事でもこなせるようになっていくのだそうです。昔の蝋型による仕事の写真を見せていただきましたが、その緻密さと自由な動きの表現に、これまで鋳物に抱いていたイメージを覆され、その技術の素晴らしさに思わずため息が出てしまいました。大谷さんもこの技術を目指してやってきてはいるが、正直いまだに極めることは出来ない、鋳物の仕事というのは奥が深いと仰られていました。

伝統的な鋳物製作の業界のことを伺うと、やはり一番問題になっているのは仕事の量だそうです。大阪でもいくつもあった工房が仕事を続けていくことができずに店をたたみ、今では一、二件を数えるほどしか残っていないとのこと。大谷さんもあまりにも変化の早い世情にあって、仕事が切れ目なく続く保障がまったくないことへの不安は常に感じられているということでした。「人を育てて技術を残したくても、仕事が無ければ話になりません。」と強い口調で仰られていました。

その一方で意外に感じたのは、「大谷さんの長い歴史の中で見ると、今という時代はどうですか?」という問いに対して、大谷さんが今が一番良い時代に思えると仰っていたことです。明治維新の頃、徳川からの仕事をしていたために大変な目に遭ったり、丸一代の間仕事が無く余った炭でたどんを作って生計を立てた時代もあったということも聞いておられるそうです。そして「戦災に遭い全焼しましたが、ここまで立ち直ることができたのも先代のお蔭だと感謝しています。」と仰られていました。

大谷さんは「今は科学の進歩のお蔭で仕事が早く出来上がりすぎ、仕事がなくなるような時代に思います。」と言われます。機械化が進み仕事のスピードもアップして、手作業には厳しい納期を迫られることがあり、確かにその面での苦労は絶えないとのこと。しかしそれでも家族皆で仕事をやっているからこそ、そういう局面も乗り切ることができるのだそうです。そして今の時代だからこそ、この文化財の仕事をする上では自分の専門に特化するだけではなく何でも出来るようにならないと続けていけないと仰られていたのが印象的でした。

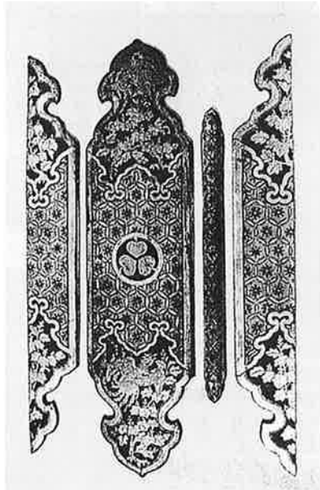
現在製作中の大極殿のシビ。
このような大きなものともなると、6人がかりでの作業となる。

『錺（かざり）の響（こえ）』

森本錺金具製作所　森 本 安之助

この『錺の響』は平成14年4月から産経新聞・西日本版「美とくらし」欄に月二回掲載されたものを同氏の許可（ならびに産経新聞、支局長の承諾）を受けて転載したものです。

（注）森本安之助氏は錺金具の技術で、国の「選定保存技術保持者認定」を受けておられ、今も現役で活躍されておられる斯界の第一人者で、当協議会の顧問をしておられます。



修理でわかる先人の技

国宝で、世界遺産でもある元離宮二条城が今年、築四百年を迎えます。以前その二の丸御殿の大広間一の間の帳台襖（ちょうだいふすま）定規縁錺金具（写真）と引手金具などの修理をさせていただきましたが、大広間一の間といえば、慶応三年（1867）十月、十五代将軍徳川慶喜が大政奉還を発表した部屋。歴史の重さをひしひしと感じました。

さて、一般に国宝や重要文化財の修理では、使えるものは全て再利用するのが原則です。錺金具も同様で、作業は錺金具の付いている建具を取り外すことから始めます。

金具そのものはもちろんのこと、建物を傷つけてはならないので十分注意していねいに作業を行います。取り外したものはその順に必ず番号を記します。そして、当方に持ち帰り作業を進めます。

肝心なことは、在来品と寸分違わないものを作ること。先人達の技を学び、多くの制約の範囲内でよりよいものを納めるよう心掛けて精進しています。

とはいえ、通常の屋根の葺替え工事では、予算の関係から金具まで手をかけることは少なく、金具の修理の周期は、半解体または全面解体を行う数十年以上何百年ということになり、その酸化や塵埃による汚れは想像以上のものです。

仕事の工程は苛性ソーダ液で汚れ・油気を取り、梅酢で緑青を落します。このときいつも感じるのは水銀箔焼付鍍金の優秀さです。

緑青の層を剥がすと、金箆で磨き上げられた金鍍金の表面が残っているのです。もちろん全体ではないのですが、電気メッキの仕上げではこうはなりません。手技のすごさを納得する瞬間です。

よみがえる文様

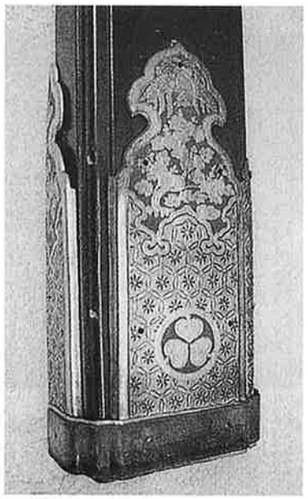
錺金具の修理・復元について、二条城の二の丸御殿・大広間一の間「帳台襖（ちょうだいふすま）定規縁錺金具」を例にお話しましょう。

修理・復元に課せられるのは、在来品と全く同じものを作ることです。そのためにまず、薄い和紙で形状・文様の拓本を取り、これをもとに型紙を作ります。

この型紙を刷り込み刷毛で一・五ミリの銅板に写し（形刷き＝かたはき）輪郭をタガネで切り取り、地金を取り外して歪みを取ります。

〝定規縁〟の見付には、三ミリと六ミリの厚みがあるので、輪郭の内側にタガネで溝をいれ、一・五ミリの板を曲げてその厚みをつくります。

そしてナマシ→酸洗い→「整形」→再ナマシ→炭研ぎ→バフ（布）研磨→脱脂→硫酸水銀塗→金箔五度押→加熱→水銀焼抜き→苗蕨磨きで水銀を完全に拭き取る→梅酢洗い→アク抜き→金箆磨き→米糊溶液を薄くぬり、加熱乾燥を経て、ようやく「素地拵（こしら）え」ができあがります。



整形では、当て金を当て、木槌・金槌で曲げ、完全な形を作ります。米糊をぬるのは、鍍金の保護と反射を防ぐ工夫です。

素地が出来たら、いよいよ「彫り」に入ります。

とはいえ二条城は〝関ヶ原〟からわずか三年、世情もいまだ落ち着かぬ中、徳川家康がその威信をかけて築いた城。

帳台襖定規縁錺金具に彫られている文様（写真）も、中央に「葵文」を据え、七宝文で周りを囲み、その外側に豊臣と関わり深い「桐」を配し、さらに先端に鳳凰を置くという意味深長なもの。文様の流麗な線に、下絵を描いたのは名のある絵師だったのでは、という想像もふくらみます。

平成20年度社寺建造物装飾技術者研修実施計画

今年度の研修事業を以下の要領で実施します。今年もふるっての参加をお待ちしています。

事業概要	建造物装飾技術のマニュアルの標準化と練磨、伝承者育成と技術者の人材確保を目的として以下の研修会を実施する。 1．建造物装飾技術国内研修　4．固有技術向上研修会 2．建造物装飾技術海外研修　5．会員研修会 3．文化財漆工事実務研修会　6．後継者養成実技研修会
事業期間	平成20年6月1日～平成21年3月31日
事業内容	**1．建造物装飾技術国内研修**　＜対象：初任・中級技術者＞ 当協議会の技術者研修生が、建造物装飾の中で選定した研究テーマに沿って、毎月国内各地に赴き調査、研究、手板見本・サンプルなどの製作を実施する。 **2．建造物装飾技術海外研修**　＜対象：初任・中級技術者＞ 建造物装飾について海外にまで視野を広げて研究テーマを設定し、当地に赴いて調査、研究を行う。 **3．固有技術向上研修会** ◆ 丹塗技術研修会　＜対象：初任者・中級技術者＞ ケレンから仕上げまで、丹塗技術の実際を実物を用いて実技研修する。 ◆ 金工技術研修会　＜対象：中級技術者＞ たたらの足跡を訪ねる見学会を行い、日本文化における金工について研修するとともに、これからの金工のあり方について考える機会とする。 **4．文化財漆工事実務研修会**　＜対象：初任者・中級技術者＞ 漆工史、成分分析法、調査記録法などの講義と実習を行い、漆の文化財修復に携わる技術者としての実務を学ぶ。 **5．会員研修会**　＜対象：会員＞ 文化庁よりご推薦いただいた韓国の文化財保存技術の関連施設において、韓国の修復技術を研修する。 **6．後継者養成実技研修会** 京都伝統工芸大学校他3校と連携し、文化財建造物装飾に関心のある後継者を各事業所に受け入れ、仕事の実際を体験してもらうことで、人材の確保に繋げる。

第19回 通常総会報告

昨年12月に平成20年度の総会を開催しました。会員10社10名の出席のもと、活発な議論が交わされました。

議事内容としては、これまで会長が会の運営を一手に引き受けて来ましたが、今後は会長、副会長を中心とする役員の合議制で進め、それを全会員に諮っていくことが決まりました。会の運営に複数が参画していくことでの活性化が期待されます。さらに、会の基金を設立し財政基盤を固めていこうということも全会一致で決まりました。

去年社美協は〝建造物装飾〟というジャンルで国の選定保存技術保存団体の認定を受けました。会を取り巻く環境の変化とともに、社美協のこれからについても会員全員で話し合うべき時期に来ています。今回の総会では、そうした変化を出席者全員で共通認識することができたと思います。さらに今年2月には臨時総会を開催し、副会長の選出も含め、社美協の今後の方針を諮っていくことになっています。会員の皆さんの意見を尽くして社美協のこれからを方向付けていく臨時総会になることと思います。

「社寺建造物美術協議会」名簿

（五十音順）　　平成19年3月

	法人名（個人名）	代表者名	住所	TEL・FAX番号
1	㈱大谷相模掾鋳所	大谷哲秀（大谷秀一）	〒537-0011 大阪市東成区東今里2-6-20	TEL 06-6971-6571 FAX 06-6971-6511
2	㈱片山	片山冨夫	〒601-8303 京都市南区吉祥院向田東町10	TEL 075-322-1236 FAX 075-316-6333
3	㈲川面美術研究所	荒木かおり	〒616-8242 京都市右京区鳴滝本町69-2	TEL 075-464-0725 FAX 075-464-0099
4	岸野美術漆工業㈱	岸野勲	〒321-1404 栃木県日光市御幸町587-2	TEL 0288-53-3366 FAX 0288-54-0072
5	㈶塩尻木曽地域地場産業振興センター	小口利	〒399-6302 長野県塩尻市木曽平沢2272-7	TEL 0264-34-3888 FAX 0264-34-2832
6	㈱小西美術工藝社	小西美奈	〒108-0014 東京都港区芝4-4-5 三田KMビル3F	TEL 03-5765-1481 FAX 03-3455-9250
7	㈲齋藤漆工芸	齋藤敏彦	〒250-0631 神奈川県足柄下郡箱根町 仙石原1285-381	TEL 0460-84-2802 FAX 0460-84-0770
8	㈱さかい	酒井清	〒520-2331 滋賀県野洲市小篠原7-1	TEL 0775-87-1178 FAX 0775-87-5355
9	㈱さわの道玄	澤野道玄	〒604-8232 京都市中京区錦小路通 油小路東入る空也町491	TEL 075-254-3885 FAX 075-254-3886
10	㈲鈴木錺金具工芸社	鈴木正男	〒321-1412 栃木県日光市東和町57-1	TEL 0288-53-1121 FAX 0288-54-3263
11	㈱はせがわ美術工芸	三好金司	〒822-0011 福岡県直方市 大字中泉字今林885-26	TEL 0949-24-7211 FAX 0949-24-7221
12	㈱細川社寺巧藝社	細川夫美子	〒651-2242 兵庫県神戸市西区 井吹台東町1-5-13-301	TEL 078-997-7178 FAX 078-997-7179
13	邑田漆芸㈱	邑田正廣	〒607-8355 京都市山科区西野大鳥井町118-45	TEL 075-591-4137 FAX 075-502-0638
14	㈱森本錺金具製作所	森本大隆（森本安之助）	〒600-8321 京都市下京区楊梅通 西洞院東入ル八百屋町59	TEL 075-351-3772 FAX 075-361-8877
15	㈲横山金具工房	横山智明（横山義雄）	〒601-8394 京都市南区吉祥院 中河原里北町14-3	TEL 075-325-4861 FAX 075-325-4862

編集後記

今号は昨年11月から始まっている研修事業の報告を中心に掲載させていただきました。これまでに彩色・金工部門の研修と会員研修、国内研修（継続中）をすでに実施しており、今後も漆研修、後継者養成研修と続きます。

研修事業は今年から始まったばかり、すべてが初めての経験です。今回の経験を次からの研修に活かしていければと思っておりますので、ご意見、ご要望などお寄せいただけましたら幸いです。

社寺建造物美術協議会
事務局　木村小絵子